

「心が動く造形活動」

提出日 30年12月 26日
支部長名 小山 洋子

- 実施日 平成 30年 12月 15日 (土)
時 間 14時 30分～ 17時 00分
- 共 催 なし
- 会 場 大阪教育大学附属幼稚園
- 参加者 全国幼児教育研究協会会員、大阪府下幼児教育関係者（計82名）
- 講 師 所属・職名 大阪教育大学 教授

名前 佐藤 賢司

○ 内 容

- ・大阪教育大学附属幼稚園「ふよう子どもてんらん会」参観
- ・実技研修

保育者自身が教材に触れ、その教材の良さやおもしろさを感じ「やってみたい」と心を動かす体験をした。具体的な内容は以下の通りである。

①白い画用紙に様々な道具を使い絵具で色を塗る。
道具ははけ、発泡スチロール、段ボール、手である。

②始めは様子を見ながら色を塗っていた参加者も、
時間と共に面白くなってき、参加それぞれが自分
なりに工夫し、楽しんだ。

③できたものが乾いた
後に、L字の紙を2
枚使い、自分の好き
な模様の部分を切り
取る。



④それを台紙に張り、2種類のを制作する。

⑤できたものにサインをし、作品の題名をつけ、最後は1枚を参加者全員で交換し合う。



・講話

造形の指導とは「何を」指導することなのか？私たち大人は自分で意識せずに、造形表現の「コト」性よりも、つくられた「モノ」性に縛られているのではないか。子どもの絵を見る時に“理想的な絵”の想定は、時に子どもの表現のまなざしを固定化させるのではないか。子どもの絵を、その子どもに関係なく語られることは、大人にとって意味があるだけではないか。大人が発達や絵について語るのは、それが大人自身のためになるからである。

子どもの思いに添った支援とは「作品というモノから、描く・表わすというコトへのまなざしの転換」「先生の作品ではなく、子どもの作品」「作品から『指導の様子』＝先生の声ではなく『子どもの思い・つぶやき』＝が聞こえること」ではないか。

日々、子どもの体温を感じ、その成長を見守っている、その子にとっての先生だからこそ出来る支援が必要である。

○まとめ（成果と課題）

「絵をかきましょう」ではなく「いろいろな道具を使って絵具の付け方を試みましょう」で始まった実技研修では、保育者自身が概念にとらわれることなく、造形活動を楽しむことができた。割った発泡スチロールのいろいろな面で色の付き具合を試したり、はけや段ボールなどを使ったり、色を重ねたり、活動する中で保育者自身の心がワクワク動き、「もっとやってみたい」「次はこうしてみよう」など時間を忘れて楽しむことができた。今回の実技研修のように保育者自身が教材の良さを知り、心を動かす活動を体験し、保育の中に生かしていけるようにすることが大切だと改めて感じた。

講師の先生の講話からは、私たち保育者が大人にとって意味のある絵を指導するのではなく、子どもの「思い」に添った支援をする大切さを教えていただいた。これは造形活動だけではなく、保育全ての場面で言えることではないかと感じた。保育者自身が研修を通して学びを深め、さらに保育の質を向上していくことが必要であると考えた。